

犬飼ターボ 「オレンジレッシン。」未公開シーン

「げえー！！」の後に来るシーン

隆志と平謝り

クミを悩ませたのはイールームズと淡島ではなかった。

夕方、作業をしていると自宅の電話が鳴った。イールームズか淡島からの催促の電話かもしれないと思いながら、いやいや受話器を取る。

それは近所のお母さんからだった。

「あ、岳田さんですか・・・お宅の隆志くんが、うちの大祐に怪我をさせたんです」

子供同士が喧嘩をして、怪我をさせたらしい。そういえば、今日は遊びから帰ってきた隆志がいつもよりもおとなしい。

（なんで子供同士の喧嘩に親が出てくるのよ！）

と思うものの怪我をさせたらそれはこちらが悪い。隆志に確かめなくてはならない。

「ねえ隆志、大祐くんと喧嘩したの？」

大きな声で言ったので少しは聞こえているはずだが、隆志は気付いてもない振りをしている。

顔を向けさせてもう一度尋ねると隆志は何も言わずにうなずいた。

「どうして喧嘩になったの」

「・・・」

隆志は口をへの字にしてなかなか言おうとしない。

「怒らないからママに教えて」

「・・・ええとね。パパがいないって言うから」

クミの胸がドキッと鳴る。

「そう。パパがいないっていじめられたのか。それで喧嘩になったの？」

隆志は首を横に振った。

「違うの？じゃあなんで喧嘩になったの」

隆志は唇を噛んでいる。とても言いにくそうだ。

「あのね。みんなが・・・ママはパパじゃない人といつも夜まで遊んでいるって・・・ううえーん」

こらえきれずに泣き出した。近所の子供たちの親にクミが夜の水商売をしていることが知られているのだ。スナックに行く途中か帰りにでもきっと見られたのだろう。父親がいないうえに母親が水商売をしているということでいじめられている。隆志に申し訳ない気持ちになった。

嗚咽している隆志を抱きしめた。

「そうか。ごめんね。ママのせいだね。でも、ママは遊んでいるんじゃないんだよ。お仕事なんだよ」

そうやって頭をなでると隆志はクミの体にしがみついて声を上げて泣き出した。ずっと我慢してきたのだろう。喧嘩の本当の理由をなかなか言わなかったのは、母親を傷つけると思ったからだ。息子の優しさに嬉し涙がでた。

「隆志、ありがとうね」

しばらく抱いていると隆志も落ち着いてきた。

まだひゃっくりが続いている。

「でもね。誰かに怪我させたらダメなんだよ。いくら喧嘩でも怪我させたほうが悪いの。ママといっしょに謝りに行こう」

隆志は素直にうなずいた。

外はすっかり暗くなっている。

駅近くでお詫びの手土産を買ってその子の家へ謝りに向かった。家を出発したときは気持ちが重かったものの、歩いているうちに肝が据わってきた。誠意を持って謝れば向こうも分かってくれるだろう。それでだめなら仕方ない。事の成り行きによっては土下座でもしてやるのだ。イールームズのストレスに比べたら大したことはない。

大祐くんの家では両親のみならず、おじいちゃんおばあちゃんまでもがずらりと並んでいた。

これは圧倒的に不利な状況だ。クミは覚悟した。

「このたびは、隆志がとんでもないことをしてしまい、申し訳ありません」と隆志にも頭を下げさせた。

お母さんが口を開いた。

「いくら子供でも、怪我させるのはどうでしょう。あなたのとこの子供がおもちゃで殴って、おっきいたんこぶができたんですよ」

「申し訳ありません」

「まあ今回は大きい怪我ではなかったからよかったものの、これが何針でも縫うようなことになったら大変よ」

「本当にそのとおりです」

「ところで、おたく、お父さんはどうしてるの？」と聞いてきたのはおばあちゃんだ。

クミは体が緊張した。ここでもお姑さんが強いのかも知れない。

「いないんです。離婚しました」

「はあ、なるほどな」

4人が全員同じ反応をした。だから夜の水商売をしている。片親だから子供が問題を起こすのも仕方がない。そんなふうに見られているのがわかった。クミは、どうしようもない怒りが心の底の方で燃え上がったが必死で抑えた。今は反論する場面ではない。ただただ平謝りするしかなかった。

二人は帰り道を歩いていた。隆志はしょぼんとしている。

「これからは気をつけるんだよ」と頭を撫でた。隆志もコクンとうなずいた。

このところ仕事ですっかりイライラしていた。隆志のことを気遣う余裕がなかった。それが子供にも出てしまったのだろう。クミは反省した。

とにかく今日はへとへとに疲れた。イールームズの件が頭の隅でどんよりと漂っていたし、隆志の親権の問題やペットホテルに預けているルナのことが見えない重荷となっている。せっかく良くなってきたと思ったら、また悪いほうに戻っている気がする。

「そうだ、こんなときはあの質問をしよう」

“今、感謝できることは何だろう？”

(そうだ、あの夫がいないことだ)

それだけでもずっと今のほうがましだ。気分が軽くなった。一つが見つかるとほかも自然とでてくるものだ。イールームズだって終わればお金がもらえる。怪我をさせたことを謝りに行っても刑務所に送られるわけではない。どうってことはない。それに、隆志の優しさに触れることが出来たのだ。

これだけの答えを思い浮かべると絶好調とまではいかないが、だいぶ気分はよくなっていた。

その後もたびたび隆志は他の子と喧嘩をしては怪我をさせた。血の気の多い息子だ。そのたびにクミは隆志を連れて何人かのおうちに謝りに行った。最初の大祐くんの家ほど責められることはなく、すぐに許してくれる家ばかりだった。最初が一番の難関だったようだ。